

1 年 A 組 社会科 単元設計・学習指導案

指導者 江角 紀行

1 日時（場所） 12 月 8 日（水） 9:40～10:30（第 1 特別教室）

2 単元設計（単元名：オセアニア州）

(1) 本単元で育成したい自立と共生の力

○よりよい社会や自分の姿を思い描く力の育成

(2) 単元目標

○世界各地で顕在化している多文化の共生は、それが見られる地域の地的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解することができる。 「知識及び技能」

○オセアニア州に暮らす人々の生活を基に、オセアニア州の地的特色を大観し理解することができる。 「知識及び技能」

○オセアニア州において、地域で見られる多文化の共生の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付きなどに着目して、それらの地的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現してすることができる。 「思考力、判断力、表現力等」

○オセアニア州について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしてすることができる。 「学びに向かう力、人間性等」

(3) 重点目標

＜本質的な問い＞

多文化の共生をより発展させるためには、どのようなことが必要だろうか。

＜永続的な理解＞

オーストラリアでは、かつて白人を優遇する白豪主義を取っていたが、ヨーロッパからの移民が減少したことなどにより、政策を変更して多文化社会を尊重するようになった。それに伴い、距離的にも近いオセアニアやアジア諸国との関係が強くなり、それらの地域からの移民が増加した。また、もともと住んでいた先住民であるアボリジニの伝統的な文化も尊重されるようになった。ただ、国内にはアジア系の移民の増加へ一部反発する意見もある。また、アボリジニたちの多くは、失業・貧困・劣悪な生活環境などの困難に直面していたり、同化政策により強制的に肉親から引き離された「奪われた世代（子どもたち）」への償いが終わっていなかったりと課題も多い。そのような現状を改善するためには、親や学校が幼少期から多様な文化についての学習や交流の機会を設け相互理解を深めたり、政府がアボリジニとの対話を重ね解決策を模索したりするなどして、背景の違う多様な人々が対等な立場に扱われ、安心して生きていくことができる社会の実現が必要である。

(4) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
○世界各地で顕在化している多文化の共生は、それが見られる地域の地的特色の影響を受けて、現れ方が異なることを理解している。 ○オセアニア州に暮らす人々の生活を基に、オセアニア州の地的特色を大観し理解している。	○オセアニア州において、地域で見られる多文化の共生の要因や影響を、州という地域の広がりや地域内の結び付きなどに着目して、それらの地的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現している。	○オセアニア州について、よりよい社会の実現を視野にそこで見られる課題を主体的に追究しようとしている。

(5) 評価の方法

パフォーマンス課題	その他の評価方法	＜パフォーマンス課題についての予備的ルーブリック＞	
2065年、日本の総人口は約8300万人になり、労働力不足の解消のために多くの移民を受け入れ、その結果「外国にルーツを持つ人」は総人口の約12%にあたる1000万人になりました。57歳になったみなさんには、小学校6年生の孫がいて、ある日、次のような質問をしてきました。 「ねえねえ、おじいちゃん、おばあちゃん、学校の先生が『日本は世界の中でも多文化社会の成功した国の一つだよ』と言っていたんだけど、どうしてそのようになったの？」と。おじいちゃんとおばあちゃんは、日本が多文化社会を迎える際に参考にした【オーストラリアの事例】を交えながら、その【成功の理由】を答えました。みなさんなら、孫にどのように説明しますか。 ただし、前半では日本が参考にしたオーストラリアが多文化社会になった【背景】を説明しなさい。後半では、日本の多文化社会の【成功の理由】について、日本の現状や今後起こりうる課題の解決に【オーストラリアの事例】をどう生かしたかを関連付けながら記入しなさい。	○行動観察 ○ワークシート ○デジタルポートフォリオ	思考・判断・表現	
		A	○B評価の基準を満たした上で、日本の多文化社会の成功の理由について、多面的・多角的に考察し、表現している。
		B	○日本の多文化社会の成功の理由について、日本の現状や今後起こりうる課題の解決にオーストラリアでの学習の成果を関連付けながら述べている。
		C	○日本の多文化社会の成功の理由について、日本の現状や今後起こりうる課題に触れられてない。また、触れられているがその解決にオーストラリアでの学習の成果を関連付けられていない。

(6) 指導計画（全9時間） ここでは、発展学習にあたる二次の指導計画を示す。

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
二次	6	・オーストラリアの多文化社会の特色について理解を深めるために、既習学習を基に「オーストラリアは世界で最も成功した多文化社会である」という言葉を評価する。	思	・既習事項を基に、ロイロノートを活用してオーストラリアの多文化社会の特色を多面的・多角的に考察している。 (デジタルポートフォリオ)
	7	・自分の意見をよりよいものに調整するために、グループ内で結論の妥当性について議論し合う。	態	・妥当性に関する仲間からの意見や仲間の発表内容から、自分の結論をよりよいものに調整している。(デジタルポートフォリオ)
	8 本時	・更に自分の意見をよりよいものに調整するために、学級全体の場で各グループの結論の妥当性について議論し合ったり、ゲストティーチャーから専門的な知見を聞いたりする。	思 態	○ ○ ・オーストラリアの多文化社会の特色について、多面的・多角的に捉え、事象同士を関連付けて考察している。 (デジタルポートフォリオ) ・多様な意見やゲストティーチャーの話から分析や検討を繰り返し、生徒が最適解を目指して自己調整しようとしている。 (デジタルポートフォリオ)
	9	・オーストラリアの多文化社会の学習で習得した知識やスキルをよりよい社会の形成に向けて活用するために、パフォーマンス課題に取り組む。	思	○ ・パフォーマンス評価

3 本単元と研究主題との関わり

(1) 生徒について

本学級の生徒32名（男子16名、女子16名）を対象に実施したアンケートでは、「楽しく前向きに授業に取り組んでいる」と回答した生徒が90%以上で、ほとんどの生徒が意欲的に社会科の学習に取り組んでいる。また、「ペア学習やグループ活動を通して、自分の考えを広げたり深めたりしている。」と回答した生徒は90%を超えており、話し合い活動にも意義を感じながら取り組んでいる。しかし、「社会の授業で学習したことを日常生活の中で活用したり、社会とのつながりを見いだしたりしている。」と回答した生徒は、約60%であり、学習したことが知識のままで留まり、日常生活や実社会に生かされていない課題がある。そこで、本実践では、学習したことが実生活や実社会の中で役に立つことを生徒が実感できるような手立てを行った。

(2) 単元について

本単元は、空間的相互依存作用や地域などに関わる視点に着目して、世界の各地域で見られる地球的課題の要因や影響をその地域的特色と関連付けて多面的・多角的に考察し、表現する力を育成することを主なねらいとしている。

本実践で取り扱うオセアニア州は、かつて、ヨーロッパの植民地であった国や現在も続いている地域があり、現在でもヨーロッパの文化の影響は大きい。近年、ヨーロッパ諸国内の経済的な結び付きの強化や少子高齢化などに伴い、オセアニア州の国々は地理的にも近いアジア・太平洋諸国との関係の強化が必要となっている。例えばオーストラリアでは、1970年代まで続いた白豪主義を撤廃して多文化主義へと舵を切り、貿易のみならず観光や留学など人の交流も活発になっている。そのような新たな移民の流入に対応するため、学校で英語以外の多言語の授業が行われたり、70以上の言語でラジオが放送されたりしている。その一方で、アジア系移民の増加に反対する動きや先住民族の経済的・社会的地位の低さが表面化するなど、解決すべき課題がある。このように、他地域との関係の変化とともに、多文化社会へと変わり、移民との関係や先住民との関係など、多文化の共生を模索している地域である。

日本は少子高齢化のため人口が1年で約40万人減少しており、外国人の人口は毎年10～20万人増加している。そのため、地理的見方・考え方の一つである「空間的相互依存作用」に着目させながら、多文化の共生を実践しているオーストラリアの取組や課題を学ぶことは、急速に多文化社会化する日本に示唆を与えるものであり、生徒にその学ぶ意義を実感させることで、持続可能な社会で貢献する主権者の一人として必要な資質・能力を育成したい。

(3) 「深い学び」の実現に向けた指導の工夫について

ア 問題解決的な学習の充実

生徒が自ら課題に向き合い、追究して他者と協働しながら解決に向かうためには、学習者である生徒自身が学習の中に学ぶ意義を見いだせることが大切である。つまり、「学ぶことが利益になる」ことを実感できるようにすることが必要である。そのため、日本の現代社会の特色の一つである多文化社会化を追究の主題に設定して、学習したことを基に現代社会を見つめ、よりよい未来を構想するようリアリティのある学びを単元の中に位置付ける。

また、生徒を本質的把握に迫らせるためには、「指導と評価の一体化」の実現が必要不可欠である。その成否を決定するものが、指導と評価の共通項である目標の明確化、構造化である。そこで、「改訂版タキソノミー」の活用による教育目標の明確化と構造化を図り、教師と生徒が目標を共有し、深い理解へと促していく。

イ 対話的な学びの充実

対話的な学びの充実には、生徒の意見が公正な判断に変容することが大切である。そこで、「生徒同士の対話」の工夫として、トゥールミン図法の活用により追究成果を論理的に思考させ、議論の焦点化を図る。そして、それぞれの意見を「引用した事実の妥当性」「事実に対する解釈の妥当性」「主張と理由付けとの妥当性」の三つの妥当性から検討し合い、自己の考えを調整・深化させる。まずは、グループでの議論、そして学級全体での議論を通して、新たに習得した知識や技能、視点等を活用して、自分の意見を公正な判断に基づく最適解に向けて修正し、深い理解へと促していく。

また、学習者が現時点で解決可能な問題の水準と教師や他者からの援助や指導によって解決可能な問題の水準があり、この二つの水準の差から決められる範囲を「発達の最近接領域」とヴィゴツキーは提唱している。つまり、教師の働きかけにより学習者の潜在的な可能性を次の水準に達するようにできることを意味している。そこで、「教師との対話」の工夫として、その理論を基に、ファシリテーターの役割を意識しながら生徒の意見を価値付け、生徒の意見を結び付けたり、新たな問いで考えに揺さぶりを掛けたりして、理解を深めさせていく。さらに、ゲストティーチャーを活用し、専門的な知見を提供することで、生徒を次の水準へと導く。

ウ 資質・能力が育つ評価の工夫

「優れた問題解決者」を目指す生徒を育てるためには、習得した知識やスキルをよりよい社会の形成に向けて活用させ、確かな社会認識を育てたり、現実的な課題解決のプロセスで必要となる思考力や実践力を身に付けさせたりすることが大切である。また、学習終末での振り返りで、自己の認知過程の吟味を行い成果や課題をメタ認知させ、学びの質の向上を図ることも必要である。そのため、リアリティのあるパフォーマンス課題の設定とOPPA(One Page Portfolio Assessment)を活用する。

4 本時の指導（8／9時間）

(1) 主題

全体での議論やゲストティーチャーの話を通して、「多文化の共生」を実現する上で大切なことを理解しよう。

(2) ねらい

○全体での議論やゲストティーチャーの話を通して、「多文化の共生」を実現する上で大切なことについて多面的・多角的に捉え、事象同士を関連付けて考察することができる。

○全体での議論やゲストティーチャーの話を通して、自分の意見について分析や検討を繰り返し、より公正な判断に調整することができる。

(3) 展開

学習活動 (形態)	時間	○教師の働きかけ ・ 予想される生徒の反応	○指導の工夫 ◎評価規準（評価方法）
1 これまでの活動と本日の活動の流れを確認する。（一斉）	5	○これまでの活動と本日の授業の流れを確認しよう。 ・ オーストラリアの多文化社会の背景や影響を学んできた。 ・ 妥当性の議論やゲストティーチャーの話で理解を深める。	○思考の方向付けのため、学習の振り返りと本時の流れを説明する。
2 グループの意見を発表し合い、お互いの発表内容について、妥当性を検討し、意見を出し合う。（全体） 【七つの班の発表は前時。本時は1班のみ】	10	「オーストラリアの多文化の共生は本当に成功しているのだろうか。」について、グループの意見を発表しよう。 ・ 90点：他国の多文化社会よりも比較的問題が少なく、学校では日本語を含む外国語教育が行われ、移民に対応するために多くの言語でラジオ放送が行われているから。ただ、アジア系移民へ反対する動きもあるからマイナス10点。 ・ 50点：学校での外国語や多文化教育は評価できる。一方で、先住民の経済的・社会的地位が低く、移民への反対への動きがあり、多文化社会が成功しているとはいいいにくいから。 ○各グループの発表内容を、「主張との妥当性」「事実の妥当性」「解釈の妥当性」の三つの視点で検討し合おう。 ・ 取り上げている事実は、課題とはあまり関係ない。 ・ 事象への解釈が無理がある。他に関係の深い事実はないか。 ・ 理由付けの説明と点数の開きが大きすぎて一致していない。	○論理的な思考を促すために、トウルミン図法に根拠となる事実や解釈、主張を記入させ、結論に至ったプロセスを提示させながら発表させる。
3 教師による新たな問いについて考える。（全体）	10	○全グループの意見を比較し、どのような傾向が見られるか。また、多文化の共生を成功させるために、何が大切なのか。 ・ 経済や先住民の項目を多く選んでいる。 ・ 異文化の者同士が交流する機会を増やすことが大切。 ・ 多様な人々が対等な立場で扱われることが大切	○各グループの発表内容を三つの視点から検討させ、オーストラリア多文化共生の特色を多面的・多角的に捉えさせる。
4 ゲストティーチャーの話を聞く。（全体）	10	○ゲストティーチャーの話から、オーストラリアの多文化の共生について理解を深めよう。 ・ 私の追究結果と同じで、多文化理解の教育が進んでいる。 ・ 自分が調べていない先住民の現状や問題が新たに分かった。	○多文化共生において大切なことに気付かせるために、各グループの意見を比較・関連付けて分析させる。
5 これまでの学習を振り返り、自分自身の主張の最終案を考え、発表する。（個人）	15	○これまでの学習を振り返り、最終案を完成させよう。 ・ 90→70点：最初は90点にしていたが、ゲストティーチャーの話を聞いて白人と先住民との経済や社会的な地位の差が大きいことの事実を知り、多文化共生として不十分だと思ったから。 ・ 50点→75点：はじめは50点にしていたが、他のグループの発表を聞いて政府が公式に先住民に謝罪したり、学校で多文化理解の授業を行ったりしており努力を感じたから。	○公正な判断に基づく最適解にさせるため、習得してきた知識や解釈の視点など再検討させる。 ◎多文化の共生を実現する上で大切なことを多面的・多角的に捉え、事象同士を関連付けて考察している。（ロイロノート） ◎多様な意見から分析や検討を繰り返し、生徒が最適解を目指して自己調整しようとしている。（ロイロノート）

授業研究の視点	○三つの妥当性を議論する「生徒同士の対話」と新たな問いの働きかけなどをする「教師との対話」，専門的な知見を提供する「ゲストティーチャーとの対話」は，深い学びを実現する上で有効か。 ○「さまざまな対話」を基に，生徒が最終案を作成し第 1 案と比較する活動は，主体的な学びを実現する上で有効か。
---------	---